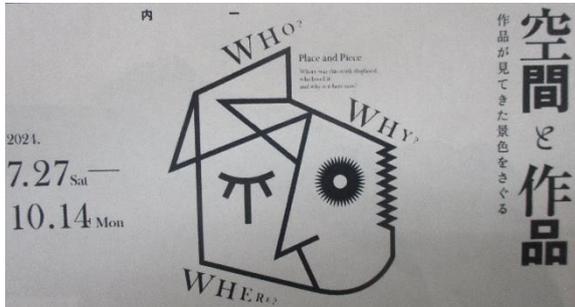


## 空間と作品 作品が見てきた景色を探る

アーティゾン美術館（京橋） 24.07.27～10.14



美術館の展示室に整然と並ぶ美術品は、誰もが鑑賞することができる公共的なものであるが、その美術品が生まれた時のことを振り返ると、邸宅の建具として作られたり、プライベートな部屋を飾るために描かれたりと、それを所有する人との関係

によって生み出されたものであることがよく分かる。

本展では、「モネ」「セザンヌ」「藤田嗣治」「琳派による作品」や「抽象絵画」まで、古今東西、様々な分野の作品からなる『石橋財団コレクション約130点』から、数多くの美術品がどのような状況で生まれ、どのように扱われ、そして受け継いでこられたのか、その時々を想像し体験している。

クロード・モネ 《黄昏 ヴェネツィア》 1908年頃 油彩/カンヴァス



画伯が静養目的で滞在して制作した「約30点」の作品の一点である。

この比類ない光に、私はますます夢中になるばかりです。何と美しいのでしょうか。悲しくなるほどです。（・・・）

もっと若い時期に、何ごとにも大胆に取り組めた時に、訪れなかったことが残念でなりません。（画伯の書簡より）



アンリ・マティス  
パブロ・ピカソ  
岸田 劉生



《画室の裸婦》 1899年  
《腕を組んですわるサルタンバンク》 1923年  
《麗子像》 1922年

